



《生殖の線 キログロティス》に寄せて

キログロティスは改めて鑑賞すると、別格にいい。

三つの花被弁が足を広げた髪の長い裸婦にみえ、芯弁はシートか何か。結晶状のものは、裸婦が持つブーケのようだ。同時に、裸婦と結晶状のものの見え方は、鑑賞者においてのみ成立する。

それは、観念（裸婦）と現実の素材（結晶）の対比を成すようにも思える。鑑賞者は、まさに、地下水や硫黄のような鉱物やらが噴出した壁の亀裂を前に、壁全体に出現した裸婦を自ら見ているというように、「見え」が成立していることを思い知らされる。

そして鑑賞者は、観念と素材の二重性とずれの中にこそ、見ることでではなく、外部に触れること、知覚、コミュニケーション一般があることを知る。すなわち、ランがハチに対してしかけていることは、まさに、このことなのだ、と思いつるのである。

結晶でありながら裸婦である錯誤の中に、完全な詐欺ではないーランの存在様式がある。半分そうではないと知りながらも、騙されたい誘惑にかられた、ハチにおけるランの見え方がある。キログロティスを前にするとき、鑑賞者は、ハチはまさに、これを見ているのではないか、と思わされることとなる。この作品は、素材と観念の二重性を際立たせることで、作品の内部に位置するモチーフと、作品外部にある鑑賞者と作品の接触面の二重性を決り出し、作品と、作品を見ることがの二重性＝豆男（注1）を、実装しているのである。

ぐ

注1 中村恭子『ランの解剖学ーランとイメージの創作性』

東京藝術大学平成22年度博士学位論文